

研究タイトル:

「センタリング理論 (Centering Theory)」の日本語談話への応用


氏名:	櫻井 靖子 / SAKURAI Yasuko	E-mail:	sakurai@asahikawa-nct.ac.jp
職名:	准教授	学位:	修士(教育学)
所属学会・協会:	日本語用論学会, 日本英語学会, 全国英語教育学会, 北海道英語教育学会, 高等専門学校英語教育学会		
キーワード:	談話語用論, 機能統語論		
技術相談 提供可能技術:	・語用論や談話分析に関するワークショップ ・国際交流支援 ・		

研究内容: 日本語談話における「センタリング理論」の研究

発話ごとの「対象(center)」がどのように焦点化され談話の一貫性(coherence)を成すかをモデル化した「センタリング」を研究しています。

英語での談話に基づく「主語 > 目的語 > その他」の順に対象が焦点化されやすいと言われていますが、英語と異なる言語での談話においては、英語には見られない文法機能の存在から、それぞれの言語での焦点化の順位が考えられます。日本語の談話の場合、主題を表す助詞の「は」がついた対象や、ゼロ代名詞(発話中で省略されているもの)となった対象が、主語よりも焦点化されやすくなります。

(1) Mary ate the cake.

☞ 主語の Mary が最も焦点化された対象で、次の発話においても最も焦点化される可能性が高い。

(2) メアリーがケーキを食べた。

☞ 主語を表す助詞「が」がついた「メアリー」が最も焦点化され、「メアリー」が次の発話でも最も焦点化される可能性が高い。

(3) ケーキはメアリーが食べた。

☞ 主題を表す助詞「は」がついた「ケーキ(目的語)」が主語「メアリー」よりも焦点化された対象で、「ケーキ」が次の発話でも最も焦点化される可能性が高い。

また、英語は「主語-動詞-目的語」が基本語順の「主要部前置言語」であるのに対し、日本語は「主語-目的語-動詞」が基本語順の「主要部後置言語」であることも、焦点化の順位づけに関わると考え、複文(主節と従属節からなる文)におけるセンタリングについても検証しています。

提供可能な設備・機器:
名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	